

介護技術教育におけるコラージュ作成の効果 (1) —コミュニケーション技法を高める—

谷口 敏代
原野かおり

Effects of Collage for Communication skill in the Care-work Students(1)

Abstract

Some psychological studies suggest that magazine picture collage promote to self-awareness and others understanding. This study researched the care work student's recognition about the collage activities for communication skills. The negative feeling of POMS(Profile of Mood States) lowered by making collage, and vigor rose Self-awareness and others understanding promoted after collage, and the warm emotion occurred in the group process. But, some students expressed a negative emotion to collage. These results suggested that, it can make use of it as a subject which raises a communication skills by doing class development in consideration of the psychological intervention to the student.

Key words: collage care-work student self-awareness others understanding

目的

介護福祉を取り巻く社会状況はめまぐるしく変化し、価値観の多様化が益々進んでいるが、さまざまな障害のレベルにある人達の生活の質を維持・向上できるように援助していかなければならないことは言うまでもない。その基盤には利用者及び利用者を取り巻く周囲の人々、さらには介護職員や他職種の人々との意思疎通や精神的な交流がある。

今回の改正カリキュラム時には人の心を理解し意思疎通を図るためのコミュニケーション関連科目の強化が図られ、2000年4月から実施されているカリキュラム見直し時の「期待される介護福祉士像」には、①感性豊かな人間性と教養を身につけ、人の心を共感的に理解できること、②意思疎通を適切に行い、介護を必要とする人と信頼関係が築けること（介護計画の立案能力、介護過程展開能力、自立支援、他職種との協働など他4項目）が示された。「感性豊かな人間性と教養」「共感的理解」「意思疎通」「人間関係を築く」ための力を専門職業人として修得するためには、まず自己理解と・他者理解さらに共感的理解が不可欠で、人間尊重の態度で相手の話を積極的に聴くことから始めなければならない。

介護福祉教育課程の「介護技術」「介護実習」「社会的福祉援助技術」をはじめとするさまざまな科目には人間形成能力を養う内容が含まれている。中でも教科「介護技術」の単元「コミュニケーション技法」は入学当初の4月に教授され、学生達が入学までに習得している対人関係技術を基盤に専門的な技術へと発展でき専門職業人としてのコミュニケーション技法について強い関心と動機づけを持たせるという位置付けにある。

今回、コラージュを作成し、相手の話を聴き、他者理解さらには自己理解を深めることを試みた。コラージュ“collage”とは、collerという語源からなるフランス語「糊による貼り付け」を意味する。写真や絵や文字などを新聞や雑誌から切り抜き、画用紙やケント紙などに貼って一つの作品にするものである。20世紀初頭にピカソ (Picasso,P, 1881-1973) やブラック (Braque,G, 1882-1963) が始めた技法で現代美術の重要な技法の一つである。1950年代からアメリカやカナダの精神病院では作業療法の分野で用いられ、次第に芸術療法に取り入れられた経緯がある。日本では1987年代から森谷寛之氏や入江茂氏・杉浦京子氏が個人心理療法に導入し始めた。医療のみならずホームヘルパー等の共感性の開発の目的でグループでコラージュを作成したり、教育の現場で生徒の他者理解や自己理解、自己開発のためにグループでコラージュを作成するなど福祉・教育等の様々な分野に広がっている^{1) 2) 3) 4)}。杉浦ら⁵⁾ は大きな1枚の紙にあらかじめ決めたテーマにそって集団コラージュを作成し、心身のストレス解消、メンタルヘルスへの好影響、対人関係における積極性の変化や自己拡大などを示唆し、自己開発的意義を実証している。そこで本研究ではコラージュ作成過程の学生の認識を明らかにすることを目的とし、「コミュニケーション技法」の教材としての可能性を検討する。

研究方法及び手続き

1. 対象

「生活福祉特講」の講義時間に、介護福祉士をめざす短期大学生2年49名の学生を対象に実施した。4名の学生はコラージュ制作2回目である。

2. 手続き

コラージュ作成はマガジンプクチャーコラージュ法（雑誌やカタログなどの材料を用意し、利用者自身が切り取り、台紙に貼り付ける方法）で行った。雑誌は筆者らが用意したものと、学生各自が持ち寄った両方を使用した。ハサミ、ノリは各自に1つずつ用意した。

手順としては約10分で配布した資料に基づきコラージュについて説明し、50分で各自が作成し、15分程で作品について話し合った。

実施前に作成上の注意をし、『雑誌やパンフレットなどから、自分の好きなことや気に掛かることをテーマに絵や写真・文字を選び出し、ハサミで切り抜いて、台紙の上に好きなように貼り付けてください』と教示した。画用紙の四切りと八切りを用意し、自由に選択できるようにした。

コラージュ作成前は気分の変化を温度計に見立てた「気分温度計」⁶⁾ で測定した。これはPOMS

(Profile of Mood States) 尺度の「緊張－不安」「抑うつ－落ち込み」「怒り－敵意」「活気」「疲労」「混乱」の6つの気分をマイナス30℃から50℃までの温度計の上にそれぞれの気分を表す顔の表情の絵と言葉が記入されている。それぞれの気分を温度計に見立てて、色塗りする。POMSの尺度は65項目あるが、90分の授業時間内で負担のかからないことを考慮し、視覚評価法の「気分温度計」を使用した。「緊張－不安」「抑うつ－落ち込み」「怒り－敵意」「疲労」「混乱」の各気分はネガティブな気分と捉えられるので値が低いほど心理的ストレスは軽減していることを示し、「活気」は値が高いほどポジティブ気分が高いことを示す。さらに、作成後には①気分温度計と②作成中に感じた気分を楽しい・面白い・苦しい・嫌・不安・楽の中から一つ選択する、③作成中に感じたことを自由記述する、④友人の作成したコラージュを鑑賞しての感想を自由記述させた。

3. 分析方法

コラージュ作成前後の気分の差を見るために各温度計毎の結果をt検定 (paired t test) を行った。調査票の自由記述内容は筆者ら2名で1内容を1分析単位として類似性に基づいて分類し、コラージュ作品は「統合性」「テーマ性」「第一印象」の分析を行った。

4. 倫理的配慮

データはすべてコンピュータ入力し、それぞれを記号化することで匿名性を保持した。また、調査にあたり、強制ではないこと、調査内容やデータは集計・分析し、研究及び今後の授業に役立てること以外には使用しないことを口頭で行い、承諾を得た。

結果と考察

1. コラージュ作成による気分変容

コラージュ作成前後を比較したところ、「緊張－不安」 ($t=4.44$ $p<.01$) 「抑うつ－落ち込み」 ($t=3.83$ $p<.01$) 「怒り－敵意」 ($t=2.58$ $p<.05$) 「活気」 ($t=3.60$ $p<.01$) 「疲労」 ($t=2.81$ $p<.01$) 「混乱」 ($t=2.99$ $p<.01$) でいずれも有意差がみられた (table 1)。

Table 1 コラージュ作成前後の気分変化の比較 n=46

POMS尺度	温度計表示言語	コラージュ作成前		コラージュ作成後		t値
		mean	SD	mean	SD	
緊張－不安	きんちょうする そわそわ しんばい	4.5	18.6	-2.76	17.1	4.44 **
抑うつ－落ち込み	たのしくない かなしい さびしい	1.0	18.3	-7.17	15.8	3.83 **
怒り－敵意	はらがたつ イライラ いじわる	-0.5	24.5	-7.39	21.7	2.58 *
活気	げんきいっぱい きぶんがすっきり	12.7	20.8	23.28	16.8	3.60 **
疲労	つかれた ぐったり	14.9	22.7	6.04	15.8	2.81 **
混乱	わからない うまくかんがえられない	7.2	16.5	-0.24	17.2	2.99 **

**p<.01 *p<.05

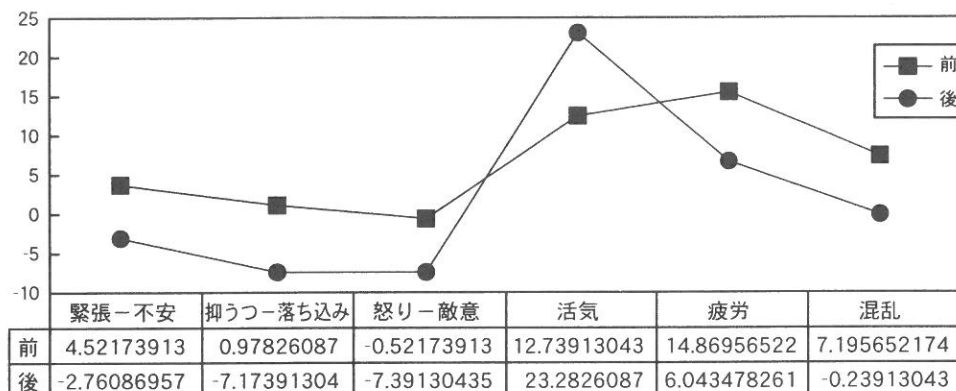


Figure 1 コラージュ作成前後の気分変化

Figure 1はTable 1を図示したものだが「緊張-不安」「抑うつ-落ち込み」「怒り-敵意」「疲労」「混乱」のネガティブな気分は低くなり、ポジティブ気分の「活気」は高くなった。

また、作成中に感じた気分は、43名（93.4%）は「楽しい」「面白い」「楽」と評価し、「苦しい」「嫌」「不安」と評価したのは3名（6.6%）いた（table 2）。

コラージュの作成による気分変容は杉浦ら⁷⁾、青木⁸⁾、落合⁹⁾、鈴木ら¹⁰⁾らの先行研究と同様な結果がみられ、心理的ストレスは軽減している。しかし、コラージュ作成に否定感情や感情表出に抵抗がある学生も居るので強制的に進めることは避けなければならない。

コラージュの作業は「カッティング」「構成」「貼付」の行程¹¹⁾があるが、カッティングは雑誌類から自由にパーツを選択したり不要なパーツを排除したりしながら感情を動かしていく。次に切り集めたパーツを使って台紙空間に自由に配置し位置の確認し糊付け固定し作業を終える。これらの行為は遊び感覚も加わりカタルシス効果が働いた結果であろう。

Table 2コラージュ作成中の気分

	n	%
楽しい	26	56.5
面白い	15	32.6
苦しい	1	2.2
嫌	1	2.2
不安	1	2.2
楽	2	4.3

2. 作成中に感じたこと

コラージュ作成中に感じた記述内容は104データが得られた（table 3）。杉浦¹²⁾はコラージュには心理的退行、自己表出、内面の意識化、自己表現と美意識の満足、言語面接の補助的要素、診断材料、ラポール・相互作用、コミュニケーションの媒介の心理的効果があると考えている。今回の調査でも「いろんな写真があつて見るだけでも楽しかった」「切り取っていくのはとても楽しかった」「自分の好きなもの、気になるものをどんどん切って貼っていくのはとても楽しかった」「好きなものだけ集めて貼るのはとても楽しかった」「あっという間に時間が過ぎた」のように、コラージュ・アクティビティによる心理的退行が66データ（63.5%）を占め、楽しく熱心に取り組んでいた。し

介護技術教育におけるコラージュ作成の効果（1）～コミュニケーション技法を高める～

Table 3 作成中に感じた内容の分析

n=104

内 容	記 述 例	n	%
心理的退行	【肯定的感情】 好きなものだけ集めて貼るのはとても楽しかった。 あつという間に時間が過ぎてしまいました。	52	50
	【否定的感情】 体調不良で苦しかった。 思っている絵がないとイライラしてくる。	14	13.5
気持ちの解放	作業していくうちにどんどん気持ちがあぐれた。 気分が落ちてたけど、少し楽になった。	3	2.9
内面の意識化	一つ選んだらそこからテーマが生まれて選ぶきっかけになってしまったことは 自分をある程度制限してしまったかなと後で感じました。 自分の心の中の他人には知られない事を切り抜きのあるものに置き換えて自分 の目で見るという行為はなかなかおもしろい。	8	7.7
自己表現と美意識の満足	私的にうまくできたかなって思ってみんなに見てもらいたいと感じた。 最初は何を貼ってよいか迷ってしまって、なかなか作品をつくっていくことが できなかったが、自分の作った物に愛着がわきました。	17	16.3
介護福祉士としての活用	自分の思いを簡単に表すことができるので、高齢者や障害者に関係なく楽しく 作成出来ると思いました。 高齢者に対して行う場合、私たち以上に迷うと思うので、うまく援助していく 事が大切だと思った。	3	2.9
その他	こまごまとしたごみが出る。 もっと広い机でしたいと思った。	7	6.7

かし、‘体調不良で苦しかった’ ‘少しストレスを感じた’ ‘思っている絵がないとイライラしてくる’ といった否定的な感情も記述されており、精神・身体状況への配慮が求められる。

また、‘うまくできたかなって思ってみんなに見てもらいたいと感じた’ ‘自分の作った物に愛着がわきました’ のように出来上がった作品に満足し友人に自己開示しようという姿勢も生まれている（17データ 16.3%）。さらに、‘何をどう貼ろうか悩んだけど、結局自分の好きなように貼ればいいので何も難しく考えなくていいんだと思った’ や ‘自分の心の中の他人には知られない事を切り抜きのあるものに置き換えて自分の目で見るという行為はなかなかおもしろい’ の様に自己の内面を意識して記述（8データ 7.7%）も見られた。白紙の用紙から描き出す絵画よりも、既存の作品から選ぶことが出来るため、作品に上手い下手が出にくく、切って貼るだけで見栄えの良い作品ができるので取り組みやすいのであろう。

介護福祉士としてのコラージュ活用性の可能性として ‘自分の思いを簡単に表すことができるので、高齢者や障害者に関係なく楽しく作成出来ると思いました’ ‘高齢者には少し難しい作業ではないかなあと思った’ ‘高齢者に対して行う場合、私たち以上に迷うと思うので、うまく援助していく事が大切だと思った’ を記述した学生も居た。切って貼る作業という遊び感覚が保健・福祉施設で行われているレクリエーションの中での表現・創作活動に共通性を見出し、卒業後の介護活動への応用として考えたのだろう。石崎¹³⁾ はコラージュは痴呆高齢者の内的世界を理解するための有用な心理学的技法であることを述べているが、基礎的な心理知識しか学習していない介護福祉士の保健・福祉施設でのコラージュ活用方法については今後の課題である。

3. グループ発表から感じたこと

友人の作成したコラージュを鑑賞しての感想から得られた82データを類似項目毎に分類し図式化

した (Figure 2)。完成した作品をグループ (5~6人編成) の前で発表し、各人が作品について自由に意見を述べ合う。メンバーの作品を鑑賞することで、自分とは異なる発想に関心を持ち、それぞれの個性や、思い描いていたイメージからその人らしさを思いやり、コラージュの伝えたいことを考えようとしている。また、発表者はコラージュに表現した思いを伝えようとする。コミュニケーションを円滑に行うためには伝えたいことを明確に表現することが求められるが、グループ発表の過程にはコラージュに表現した思いを語り、聴く過程が同時に進行されている。また、他者のコラージュを鑑賞することで自己の作品にも関心が高まり、次回への期待を抱いたり、楽しい、元気が出るといったポジティブな感情が出現し、自由な雰囲気でのコミュニケーションが展開されている。作品に込められた思いに言葉を添えて伝え合うことは、コミュニケーションが図りやすく、自己・他者理解を深める意味で効果があると考えられる。

4. コラージュ作品の特長

今回はコラージュ作品を授業「コミュニケーション技法」に取り入れる場合の安全性を視野に入れ、杉浦¹⁴⁾の分析を参考に、作品全体のバランスが取れているかどうかをみた「統合性」とテーマの有無があるかどうかの「テーマ性」、さらに楽しい・面白い・和やか・きれい・奇妙・理解に苦しむ・寂しい・冷たい・気持ち悪い等の「第一印象」の3項目の分析を試みた。バランスの取れた作品とその中間をあわせると45名 (91.8%) に統合性が認められ、バランスのとれた作品が多く見られた。なんらかのテーマを持って作成したと思われたのは44名 (89.8%) であった。第一印象では楽しい、面白い、和やか、きれいなポジティブ印象は28名 (57.1%) が筆者同士の分析で一致した。その他は面白い-理解に苦しむ、奇妙-面白い、寂しい-理解に苦しむ、気持ち悪い-理解に苦しむの組み合わせとなり評価が異なり、人間の体に犬の首をすげ替えた1事例に嫌悪感を1名の筆者が抱いた。

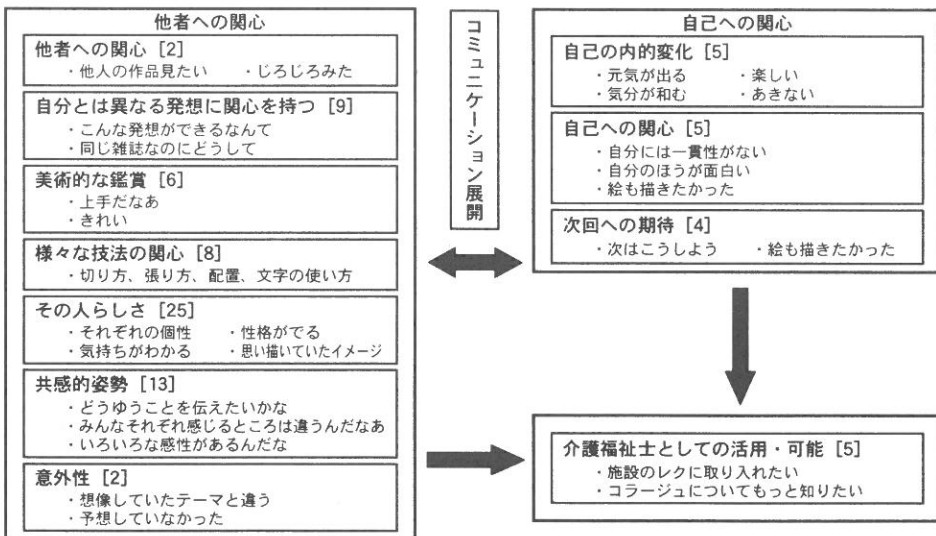


Figure 2 コラージュ作成過程のコミュニケーション展開 [] 内 データ数

コラージュは絵を描くことに抵抗のある人や、幼児から高齢者まで年齢を問わず取り組むことができる。しかし、マガジンプクチャーコラージュ法では素材が多彩となり様々な表現が可能で、作成者の内的世界が出やすい。中に奇妙な感じや嫌悪感といったネガティブな感情が表出される可能性もある。自由な雰囲気の中でコミュニケーションが展開されるためにもテーマを明確に提示するとともに、作成後の展開ではコラージュ作品と、作成者の語りを大切に、ネガティブな評価は避け教員は安全性に努めなければならない。

まとめ

コラージュ作成過程の学生の認識を明らかにした。コラージュ作成することで「緊張－不安」「抑うつ－落ち込み」「怒り－敵意」「疲労」「混乱」のネガティブな気分は低くなり、ポジティブ気分の「活気」は高くなり、作成後のグループ発表では、他者理解しようとする姿勢が生まれた。グループ発表を通しポジティブな感情交流が行われることがわかった。

しかし、意表をつき防衛機制のある学生、感情の表出に抵抗のある学生、否定的感情が強い学生への心理的影響を考慮した“コミュニケーション技法”の授業案を作成する必要性が示唆された。

謝辞

本研究にあたって、調査にご協力いただきました学生の皆様に感謝致します。

文献

- 1) 森谷寛之：現代のエスプリ コラージュ療法の実際，至文堂，p29，1999.
- 2) 杉浦京子：コラージュ療法 基礎研究と実際，川島書店，p3-10，2003.
- 3) 杉浦京子：現代のエスプリ グループでの使用，至文堂，p102，1999.
- 4) 大澤久乃・宮本正一：コラージュ制作により児童の自己認識を深め自己表現力を高める試み，岐阜大学教育学部教育実践研究，No.2，p161-171，2000.
- 5) 杉浦京子・鈴木康明・金丸降太：集団コラージュ制作の効果－社会的心理学、臨床心理学的考察－，日本医科大学基礎科学紀要，第23号，p1-15，1997.
- 6) 竹中晃二：子供のためのストレス・マネジメント教育，ストレスマネジメントの実際，北大路書房，p89-90，2000.
- 7) 5) 再掲
- 8) 青木智子：グループにおけるコラージュ技法導入の試み－コラージュエクササイズを用いたグループエンカウンターと気分変容についての検討－，日本芸術療法学会誌，vol.32，No.2，

- p26-33, 2001.
- 9) 落合幸子：大学生のコラージュ作品に見られる顔の切片の意味，茨城県立大学紀要，vol.6, p37-46, 2001.
 - 10) 鈴木由美・佐藤いづみ：大学生の授業内コラージュ作成が及ぼす心理的効果の研究，聖徳大学研究紀要短期大学部，vol.33, p57-62, 2000.
 - 11) 中村勝治：現代のエスプリ コラージュ療法の独自性，至文堂，p42-50, 1999.
 - 12) 2) 再掲 p26-30
 - 13) 石崎淳一：コラージュに見る痴呆高齢者の内的世界 中等度アルツハイマー病患者の作品から，心理臨床学研究，vol.19, No.3, 2001.
 - 14) 杉浦京子：不登校児の親の会における自主コラージュ制作とその意義ーコラージュ作品からみた母親の変化ー，日本医科大学基礎科学紀要，第21号，p7-24, 1996.

2003年10月31日受付

2003年12月25日受理